

大正十二年九月一日

関東大震火災逢難記事

時に横浜市根岸町芝生二一五七番地に居住、有名なる根岸競馬場下の海岸

鈴木達治

九月一日

朝來雨模様なり午前九時過ぎ例の如く出勤す。

昨日は天長祭日なりしを以て、かねがね約あり東京に赴き松浦和平氏宅を訪ふ（松浦氏は東京高等工業学校の前教授にて工学博士）。

相携えて目白在長崎村快進社に行き、自動車一台を購入す。此の自動車は前年松浦氏米國に赴きし時、自ら持ち帰りしビュイック社製造のものにて同氏使用後快進社へ売り、全社にて之を修繕したるものなり。

本日は学校會計にその旨報告して購入手続きを速やかに完了せんが為め特に出勤したり。

又休暇中は大抵毎日午前中に出勤し、十一時頃校門を出て弁天橋際の銀行集会所に赴き一二ゲームの玉突きをして、昼食を同所にてすることが例となり居りたり。由つて十一時校長室を出で校内を一巡せんとして教務室に入る。教務室には掛りの飯塚晶山、横地捨次郎、武田某の三人あり、偶々山本権兵衛内閣の將に成らんとする際なるを以て、談は政変に入り議論を上下す、其のうち本年度電気化学科卒業の冬木修三君來訪し、更に神奈川県にて化学出身者一名の招聘を希望する旨を伝えらる。冬木君は卒業後神奈川県に奉職したる者なり。

冬木君との交渉もほぼ終り、將に十二時にも近くなりたれば集会所へ行くべきであると考え

つつある時に、彼の大震が突然と起った。

何だか音がして校舎が震動すると思うと、横地君は「ああ地震じゃ」と一声をあげ其のまま室外に飛び出した。余は「何に大丈夫だよ」と引きとめたが何ら顧慮せられず他の諸氏も逃げ出してしまった。余は獨り部屋に残ったが椅子に倚って居たか、立って居たか全然記憶はない、ただ室内は暗くなり又同時に書棚其他のものが倒れ騒々しい音がするのを覚えて居る許りである。室内の暗くなったのは壁が落ちて土煙りが上がった為めであった。

余はいささかも周章狼狽の氣味がなかった。此は思はぬ大震であると考えたのみであった。地震は益々強くなり歩行もままならぬ氣配をしたが、兎に角室外に脱出せんとして教務室より廊下に出で右折して渡り廊下の方へ歩んだ。

渡り廊下に出るには其處に三四段の石段があるから踏み外さぬ様に注意を要す、又其處から右に脱出すると高い講堂があるから危険と考え、左へと志した時に第二震が猛烈に來り如何ともすることが出来ない様になった。

一瞬前まで政治を談じたり就職の交渉をしたりした自分は今此の天災に際会し或は校舎の倒壊の為め落命するにあらずや、人間というものは実に寸前暗黒のものであるかなという感想が忽然として腦底に浮び來った。

其時偶々渡り廊下が右方に傾き來り、越えるには高過ぎた腰板が低くなりたる為め難なく其れを越えて便所と化学教室の間から更に広く又安全なる校庭に脱出することを得て、安堵の思いをなした。

職員の既に脱出した連中は一群をなして居り、其内から横地君は「校長は出てきた」とて一声を放ち余を取り巻き喜びくれた。

校庭の一方には老婦人である小使が蹣跚まよえとして全く狂氣の如く南無妙法蓮華經のお題目を唱え、他の多数の老若の小使連中が其後に付き一種凄楚慘憺たる場面を現出し居れり。

余は自分の責任感より大震に伴う火災を想起し校舎の全部に注意し居りしに、何れも大破の状を呈し居るも倒壊せしものなきも、忽ち応用化学科の建物より白烟の上るを認めしを以て、直に防火ホースを持出すを命じ水道の消火栓に連結し消火の動作に移らしめしに噴水の状なし、鐵管破損の爲め水道の用をなさぬことを知りたり。其内応用化学科の火の手が益々上がり教室内にある各種瓦斯のボンベが爆破して頻々として雷声をふるい光景慘憺たり、せめて我校の誇りたる講堂だけでも救わんとして渡り廊下の破壊を企てたり数人の職員と力を合せ他に破壊の道具なきを以て垣にしたる針金を外して廊下の柱を縛して之を倒さんとしたるも微動だもせず余儀なく之を放棄したり。衆又危険刻々なるを以て余を請じて校舎の近くより去らしめたり。

茫然として校門に近き広場に立ち、余が管理せる校舎の猛火の爲め延焼しつつある状を見つ感慨無量の儘、初めて眼を遠く市中の方面に放てば濛々たる灰色の煙が天に漲るを見て、火災は我校舎のみでなく或は全市に及び居るかと思像して一段と悽然の感に打たる。

暫くすると学校門前の民屋より煙を上げ、南風に煽られ電車道に沿って延焼しはじめたり。

一方応用化学科の火は本館に移り行き、本館の教務室の屋上を焼きつつある時に更に講堂の空気が抜きより白煙を認むるに到り、愈々我校舎の全滅を意識覚悟したり。

此日出勤の教授には藤村・柏木・飯塚の三教授と大山・小林・中谷の三書記其他なり、最早学校の防火は此の上致し方なき状勢なるを以て、各自自宅に帰るべきを命じたり。猶校中最年長者である林正義氏（教務課雇員）も居りしが神奈川の自宅に帰る爲め途中困難をしたりといふ。

余は学校の裏手の山を越え、岡村天神の方面より帰宅せんと欲し、山麓の一農家に入り渴をいやする爲め水を求む。井水は可成り混濁せり。此家に機械学科に奉職する一職工ありてクレオソートを余に与えて其の水を飲ましめたり。裏山を越え次の山の頂きに至ると八幡橋方面を眺望することを得、刑務所の大建物は盛んに燃えつつあり猶磯子方面と滝頭方面にも火災を認むるも、余が住所である根岸芝生の海岸が無事なるが如し、稍安堵す。八幡橋電車の終点ま

で來ると道路に大なる亀裂を生じ、自動車がタイヤを没し其儘乗り捨てたるものあり八幡橋は其兩端に於て陥落し著しく斜傾し居るも通行には差し支えなし、橋を渡り、莫大小会社メリヤス（左右田の経営）をはじめ兩側の家屋多く倒れ居れり、芝生に入ると倒家割合に少し。芝生海岸には津波の形跡は更に認めざるも遙か南方の横須賀市には黒煙天に沖し火焰又數十丈、其凄愴の狀態実に言語に絶するものあり、此れ海軍貯藏の重油槽の燃燒するものにて、其後数日燃え続け時には其の煙が本牧沖を越えて遠く東京方面へ橋引きたり。

隣家小川興一氏の邸の角を廻れば余が家が見えると思ひ急ぎ行けば家が見えず、必然倒壊せしならんと覺悟せしが、それは急卒の事とて考え違ひにて門前に行き初めて我家を見るべきで幸に家は倒壊を免れ稍傾きたる程度にてありき。留守中の、喜美子老婆愛子及芳子の三人は庭の四阿の傍に居り一同無事の顔を見合せて嬉しさ限りなかりき。学校をでたのが午後一時四十分にして帰宅したのが二時四十分頃なりき。留守中の様子を聞くと喜美子はお友達と海岸の松林にて遊び居り愛子は台所に居り直に台所前の井戸側に走り出で、芳子は裸にて便所より庭の櫻樹の下に走り出で頻に老婆を呼び衣服を持ちくれと叫びたりという。

家は相当に南方に傾き居り書斎の書棚は悉く倒れ室内に足を入ることも出来ぬ状態を呈し居り、其他の各室も同様なるも幸にして陶磁器の破損は殆どなし。屋外にては泉水の金魚の大

半は池外に放出せられ、タタキ（三和土）が破れ既に一滴の水も湛えず金魚は悉く斃死せり。留守の三人が既に昼食を終りたる後にて其日ごと残飯なし、何か食物なきやと云えば冷蔵庫に西瓜ありと云う。依て恐る恐る室内に忍び入り西瓜と生卵を取り出し、初めて昼食をなす。其西瓜の冷えて美味なりしこと又一層なるを覚えたり。

又隣家の飯島氏宅にては裏山が崩れて一家三人が家と共に埋もれたるも、人夫が來り掘り出し鮮血に染まれつつ何處へか運び去られたりと。

暫く休息したが芝生の此方面は無難ならんと思ひ、再び学校へ行きたり。萬一瀧頭方面の火災が延焼し來らば家を棄て三人共離れぬ様にして裏手の根岸競馬場の周囲の何れかに避難し居れと申し付けおきたり。

午後四時家を出て元來りし道を辿り行けば、刑務所は既に焼け盡くし其他の二ヶ所も鎮火し居れり。五時頃学校の裏山に上れば水力実験室と仕上工場の二棟を除き、其他は悉く灰燼と化したる跡を望見して感慨無量なりき。

校庭に入り其後の様子を聞けば、此日稍南方の風なりしを以て北方の応用化学科の火が漸く南に移り渡り廊下を延焼しつつ仕上工場に移る際バケツの僅かなる水を以て、初めて防火効を奏し以上の二棟を残し得たりと。取り出したる僅かの帳簿類を焼け残りの工場に納め、人も悉

く帰り余獨り校庭のクローバーの草に腰を下せば、暮色蒼然として來り市中の空を眺めれば満天の雲色火に映じ四面声なく物凄き感をなしたり。学校の事も所謂萬事休すで此上は何等施すべきことも無ければ帰宅する事に決した。日既に暮れ山越しは惡路の爲め物騒と考え実習学校の脇に沿ふて行く、庶務主任の小林長之助氏等其途中の梅林に焼出されて避難して居るに逢う。蒔田の電車通まで行き見ると行く手は全部燃えつつあり、到底進み難きを以て引き返し高工寄宿舎の脇を通りて英和女学校まで行きたり。寄宿舎は幸に大破なく見えたり。女学校は山上にありて眺望に可なるを以て校庭に入り、試みに市中を瞰見す。港より伊勢佐木町、野毛山、日本橋付近等見渡し得る限り全くの火の海と化し凄愴言語に絶す、人力の微、自然の偉に打たれざるを得ず、昔のポンペイの最後も斯くありしならんと思はしめたり。

其より堀の内に下りたるも付近又燃えつつあるを以て、なるべく火に遠き道をとリ、時には倒れたる家の屋根瓦を踏み越えなどして漸く中村橋付近の堀割道に出て堀割川に沿い夜八時過ぎ無事にて帰宅す。

庭には既に避難者一家族ありたり。我等は庭の芝生の上に蚊帳を張り一同寝に就く、何れも此の慘禍に戦慄するものも無く至って呑氣千萬なること殆ど平素と異ならず。時に陰曆二十一日の月は上り天に漲る黒煙灰煙の間より時々銅色の光を放ち殺氣淒涼の氣をただよわす。猶我

等四人の外、左右田銀行に奉職しているお芳の弟隆、愛子の甥寿吉（都南銀行出勤）の二人は
帰り來らず。

二日

兩人の消息と左右田棟一の様子を知るべく朝五時四十分頃家を出で根岸付近より中村橋千歳
橋辺を徘徊して逢ふ知人に就き色々な消息等を応答質問して行くも一切不明なり。

依って一旦午前十一時頃帰宅すれば隆及び寿吉の兩人は午前九時頃帰宅したりとて家に居り
たれば大いに安堵す。寿吉は伊勢佐木町辺の都南銀行より出で横浜駅付近の左右田銀行に行き、
幸に尋ねし隆に出会し兩人にて神奈川の海岸にて船に避難したるも危険に就き更に高嶋埋立地
に行き夜を明かし、直に根岸の宅に帰らんとせしが根岸一帯は津波に襲はれ跡方もないとの流
言に失望し兩人共進退に迷ひしが兎に角一度は其跡を見んとして勇を鼓して、根岸競馬場を越
えて海岸一帯の無事を見、驚喜して家に入りたりという。

餘震は猶頻々として恐るべきものあるを以て戦々として屋内に入り見当り次第の紙筆を取り
出し、文部大臣と神奈川県知事へ二通の書を認めた。

一、九月一日小官出勤執務中、正午少し前突然激震に逢う。小官脱出に稍機を失し辛うじて

逃れ校庭に出づ。震始後僅か数分にして既に電気化学科及び応用化学科実験室より火気を認む。直に消火栓を開き消火に従事せしめんとするも鐵管に一滴の水なし。更に廊下破壊工事に着手せしも人手なく効を奏せず機械工学科工場一棟・水力実験室一棟・職工控室一棟。写真印刷室一棟（県立）。応用化学特別工場（小建築）一棟を残し他は全部焼失せし事、実に遺憾千万なり。

猶重要書類を藏する會計課保管の金庫は執務中開扉せしものを閉鎖せんとせしも激震の爲め既に扉を損じ閉鎖不能に陥れり。此が爲め内容幾分持ち出したるも危険にして屋内作業を許さず己むなく焼失に委したり。

今回の震災は当市殆ど全部を赤土と化し、本校職員中住居を失ひし者多く又多少の負傷をなしたるものあり、当日出勤者外の職員に就いては未だ一人だに消息を詳かにせず、小官夜に入り帰宅の途を失したる程にて火災四方に起り交通殆ど杜絶したる爲めなり。

謹んで報告す

横浜高等工業学校長 鈴木達治

大正十二年九月二日

文部大臣 鎌田栄吉殿

猶一通は県知事安河内麻吉氏宛にて未曾有の大惨事に際し不逞の徒が横行するものあらば港内碇泊の一汽船を召発して之に監禁収容すべしとの意見書なり。混乱の際其文を記憶又保存なし多分神奈川県庁に残り居るならん。

安河内知事は多分紅葉坂官舎の付近に居るべし、必ず知事に面会して県庁の便を以て一通は文部省へ御届けを願いたいと依頼せよとて隆を遣はす。

午後四時頃思いがけなく突然棟一宅に来る。

左右田の住宅宮崎町並に本家の住宅月岡町辺も全く赤土になりたることなれば棟一一家も如何ならんと多大の不安の處なりしを以て其無事の顔を見て全く安堵の思いをなし栽培のメロンを割り祝す。棟一は八月三十日に家族の避暑地なる鶴沼海岸の別邸に赴き居りたり。別邸は倒壊し家族三人が其下敷となり津波は其処まで來り危険至極に迫りしも幸にさしたる負傷もなく救い出されたり。本人は本日鶴沼海岸より徒歩にて横浜に帰りたるなり。留守宅には二人の女中のみなりと。

本日に至り宅に避難して庭に野宿する者十二人となる。家族は庭のあづまやに隆・寿吉は小なる温室に避難者は何れも知らぬ他人のみにて其等は大きな方の温室に又野天に寝る。

今夜より朝鮮人が放火するとか強盗殺人するとかの流言類にして物騒千万である。我家は平

素夜中と雖も、就寝前でなければ門の戸を閉さぬ習慣なるに隣人之を危み門戸を鎖ざす様注意を受けた。右の次第にて青年会の面々並びに在郷軍人連が総出にて要所々々を警戒す。

我家よりも隆及寿吉の兩人が交代にて之に参加す。

此日 天気晴朗なりしも各所の火災より起る烟煙濛々として天に漲り恰も天猶明けず猶曉天時の如し

三日

前日芳子の話に避難者中の一家族三人者に食物の携帯なく欠食の事あり芳子の注意にて当方より食事を供したり。芳子に宅に幾何の米ありやと聞けば、一兩日前米を取りし俵なるを以て猶二斗の米ありという。二斗あらば我家族には当分心配なしとするも避難者に食せしむるには心細き次第であると考え、早朝寿吉を連れて米の工夫に出掛ける。学校の先きに加籐という相当なる農家あり、兩三人づつ学生を寄宿せしむる家にて余も知り居る間柄なれば先ず此家に行き見んとて焼け跡の蒔田町まで行くと、大山春翠・小林長之助の兩書記に出合す、相携へて高工仮事務所にした高工裏の飯塚教授の宅に赴く。余が米の話に共鳴し此処で相談一決飯塚教授も共に加籐農家に赴き、此処にて玄米二斗を余は貰ひ受け寿吉と共に帰る。程なく電化三年生

児玉毅甫という学生に逢い寿吉を助けて携帯す。途中二度夕立に逢ひ雨宿りしつつ帰宅す。

此にて米四斗となり当分避難者に食を頒つことが出来ると一安心す。

本日正午頃兼て行方不明なりとて心配せし宮崎町の女中二人見すばらしき風にて泣く泣く來宅す。聞けばはじめ伊勢山に避難せしも危かりし為め更に茂木の別邸庭に逃れ其処に二泊したりと、此處は大正九年財界變動ありし際没落したる茂木氏が毎年菊の花壇を設け、客を会したる庭にて今回の災難に幾千の人命が救はれたのであった。

猶宅の庭を隔てたる處に夫婦者あり、共に小学校教師たり、別に懇意でもなければ其姓名を知らず、主人の方は当日学校にて圧死し、細君は今夕産氣を催し呻吟の聲殆ど聞くに堪えず、産氣と知り芳子は産湯の世話をでもせんとして、かれこれと立働कि中、はからずも宅に避難者中に産婆の女学生あり、幸ひと早速に赴き応急の手当をなしたり。

今夕猶市の火災の或場所は天を焦し、横須賀重油の燃燒盛んにして何時になったら消えるとも見えず。

四日 足を痛めたる為め外出せず

悲惨なる話を聞くこと多し

左右田銀行の本店は南仲通りにあり支配人合田晋氏は余と同郷の三島の産にて高商を卒業し棟一の縁故にて銀行に勤め居たり。震災の瞬間、自席にて器物等に圧せられ脱出を得ず火の襲來にて終に焼死す。同支配人にて余と同志社同窓たる鈴木左馬次郎氏あり、昼飯の爲め銀行集会所へ行くとして銀行を出るや、直に炎に遇いたるものにて其の何処で横死せしか終に判明せず。松ヶ枝町支店にては支店長重役左右田誠一氏死す。

棟一の岳父左右田金作氏の兄左右田清三郎氏は福富町に住して薬店を開業せり。清三郎氏老夫婦の外次男夫婦も家に居たり。次男夫婦は地震の時、家を出でしも親夫婦を救ひ出さんとして再び入り四人共圧死せしものと推せらるるという。

宮崎町の棟一宅、月岡町左右田喜一郎氏本宅、猶棟一妻静子さんの妹婿南官市氏の本牧宅何れも焼失す。市内左右田銀行本支店たしか七ヶ所ありしが全部焼失す。左右田一家の不幸損害此上なし。

又横浜地方裁判所長、検事正、航路標識所長の三勅任長官震死し、其役所も又焼失す。又正金銀行の周囲にも無数の焼死者累々たりと。

朝七時頃家を出づ、先ず本牧市電終点付近に住する左右田銀行支配人松崎氏の宅を訪ひ、銀行支店長会議を同氏の宅にて開くとの棟一よりの伝言を致したり。其より三溪園に至り原富太郎氏を訪ふ。三溪園は原氏の邸宅なるも市の公園として常に公開せしが、門前に柵を設けて公開を禁止せり。園内に入りしに広き道路は亀裂して大海の大浪の状を呈せり、茅葺の本邸は倒壊を免れたるも著しく破損状態にあり、本邸の隣なる桃山御殿と山上の三重塔は全く不思議なる程、依然として何等の損害を見ず。女婿西郷健雄氏家族と共に庭内にて天幕中にあり。原氏は生死不明なりと噂ありしが当時箱根の別邸にあり、昨四日無事帰宅したりとて面会す。

原氏邸を辞し本牧市電終点をへて小湊に至り教授津田幹夫氏を訪ふ。小湊辺より所々に火災の跡あるも津田氏邸は無事なり。其付近の教授安川数太郎氏を訪ふ。安川氏宅を境として市中央に向ひ殆ど全部を焼き盡くし居たり。津田氏余を送つて桜道トンネルまで来る。

トンネルは破損なきを以て通行して元町に出づ。前方を瞰視すれば一本の立木もなく一軒の焼け残り家もなく一面茫茫として全くの赤土に化し、死屍より来る異臭紛々として鼻をつき慘又惨実に形容に苦しむ。

其より元町の電車鐵橋（極度に曲がりたる）を四つ這ひになって渡り、吉浜橋の堀川筋に出づれば船は悉く焼け沈み或は半ば沈み、船中又其付近には死屍の浮び居るもの無数なり。屍は

何れもふくれ居り其何人であるかは漸く識別し得る程度なり。河岸の道路の地割れに其兩脚を挟まれ其より脱出すること能はず其俣火烟の爲め焦死したるを見たり、惨たる状見るに忍びず。其より公園市役所左右田銀行本店記念会館県庁等の焼跡を見て本町通りに出づ。此目抜きの諸建築何れも皆焼け落ちたり。中にも宏大なる正金銀行は全部花崗岩なりしを以て、避難者の多数が此建築中に逃げ込みしが、火は内部に入り殆ど全部が焼死したり。此の如き建築が焼失したことが実に不思議に思う程なり。

正金門前の石段の上のみにても二十幾人の焦死体が横たはり居たり。正金の建築を囲んで約一丈内外の石垣あり此石垣と建築との間は石疊の広場なり、此広場に相累積して黒焦の死体あり其数算なし。如何にして能く脱出し能はざりしか此も不思議に思はる。実に地獄とは斯くもあらんと戦慄する許りなり。

更に銀行集会所を見ると同所は可なり深く地中に埋没しながら全部破壊焼失したり。銀行集会所は夏休中毎日余の昼食をとりし処にて当日も友人近藤賢二氏と約し同所にて会合の筈なりき、今二三十分も地震が遅ければ余等も既に此の煉瓦家屋の屋上にありし筈にて余等は正しく此家屋と運命を共にしたること殆ど疑なし。又多数の横浜の名士も同様なりしならん。集会所の給仕連の二階にありしもの一人も免れ得ざりしという。

紅葉坂付近は移民取扱の建築物と猶其他に一軒の破壊及び焼失を免れたるものあり、県庁と市役所は其處に避難し居れり、此處に立ち寄り知事と市長に面会し、特に此の非常の災厄に面し、市民の元気を鼓舞し繁榮再興に就き語り合いたり。

其より引返し大江橋を渡り馬車道より伊勢佐木町に出づ。堀割り川の船中に死屍のある事、至る処同じ特に此處にて小児の死屍を見て特に哀れを感ず。

市の歓楽境なりし伊勢佐木町は今や全く赤土に化し、今日の炎天一滴の水さへ求むるに道なく、今昔の感低徊去るに忍びず。

夕方家に帰る、根岸の海岸まで來ると横須賀の黒烟猶依然として衰へず、且重油は海岸まで流れ來り、其が為め魚介の死滅せることを認む。

六日 晴天

午前中外出せず。午後中村橋付近の左右田銀行倉庫の一部に避難して居る左右田老未亡人を訪問し、メロン一箇を携え行く、同所より田島六郎氏夫婦と同道して夕方帰宅す。六郎氏は老夫人の實子にして田島家に行きしなり。全じく根岸海岸に住す。

今夕初めて家に入って眠る。傾きたる家には支柱を為したり、夜中時々微震あり充分に安眠

せず。

七日

朝七時四十分頃家を出で八幡橋より桜木町に向う。全くの焼野原を行く、日本橋付近に五十前後の夫婦者らしきもの若干の荷物を背と手に提げ野原を見渡しながら、此が果して元の横浜になるであらうかと嘆息しつつ歩いて居るのを見た。何處かを目当てに住み馴れた此地を去り行くものと見えた。余に一種の感慨を與えた。

桜木町より横浜駅間は可なり人通りが繁し更に神奈川方面へ行くと往來混雜する程である。製粉会社から製粉を取り出し一袋を携え行く者、或は重さに堪えぬ為め袋を破り内容を減して持ち行く者、顔も手も衣服も麦粉で白くして居る様は全く餓鬼の世の中であると思はしむ。猶配給の米穀等を貰い受け車力にて運搬する団体も相当に相交はり往來織るが如くである。

十一時頃研究所に達し主任富山保氏及其他の所員に面会し一同無事を喜び且つ祝す。研究所は横浜舎密研究所と称し、大正五年中村房次郎氏によって建設せられ、化学工業を研究する処にして、余は所長を囑託せられ富山保氏は主任として明治専門学校教授より其当時転任し來りたるもので、大正九年以後は中村氏の代りに原富太郎氏が経営せしものである。

研究所の火災を免れたるには其処の一つの僥倖があった。

研究所は当時原氏の出資に依って経営せしものなりしが、原氏は漸次に研究所の成績に興味を感じられ、成るべく頻々と研究所に出入りして其研究の様子を見たいと考えられた。併し子安の浦島町では遠隔であるからとて、原氏の邸宅に近い本牧十二天に移転せしめんとて其計画成り八月三十一日に研究所の一部を十二天に移す為め其屋根を取壊したり。然るに震災の火は其取壊しに着手したる家屋に移りたるも屋根なき為め火勢急に発展せず、其隙に乘じ所員必死の力を盡くし実験用の水などを使用して漸く之を消し止めたり。此事なくば研究所の火は更に北に延び子安一帯を烏有に帰したること疑いなき処なり。子安一帯の火災を免れたるは実に研究所員の功勞なりと云はざるを得ず。

それより日本カーボン株式会社の技師長友人石川等氏を其避難所に見舞ひ、再び神奈川の東海道街道を市中に帰り仮県庁に安河内麻吉知事を、仮市役所に渡辺勝三郎市長を訪問す。市役所にて商業会議所会頭井坂孝氏、サムライ商会野村洋三氏、憲政会の頭首戸井嘉作氏等に会う。其処を出て大江橋と吉田橋との間なる水面の災死者を見る。其河岸に白髪の老婆が十二三歳の女兒と並び其傍に一婦人が数歳の幼児を抱き又其傍に父の如き男子が水に臨みて死し居る様は特に哀れなりき。猶其付近の水面に十四五歳の女子が赤き帯をしめ衣服のまま浮かび居たり。

震災の死者は殆ど凡てが眼に入る処にては焼死者にて衣服が焼け裸になり熱火の爲め黒く油きり膨張して居るので、稀に着衣の死者を見ると又一種の惨悲を感ぜらる。

日本橋を経て弘明寺の高工に着せしは午後三時なりき。高工の裏にある飯塚教授の宅にて当日午後より職員会議を開き居りしを以て之に列席し相互救助の方法等を協議した。

会議中文部省より小使來る。會計課長よりの來書あり書中の意は八日より九月分の俸給支拂の合達であつた。有難き事には相違なきも金銭を所持しても買はんと欲する物品を売る店がない有様で全く金銭不用の昨今の状態である。

此の如き状態なれば外出しても乗り物はなく又飲食する処もなし、故に外出には必ず握り飯（梅干入）を携へ又水筒の用意も必要であつた。

安川教授及桜井助教授と同伴して山を越え夕方帰宅す。

此日留守中午後三時頃山隈芳枝氏東京代々木山谷より震災見舞に來りたり、亡妻イヨ子の従弟山隈十郎氏の妻にして十郎氏は七年前に死し未亡人なり。山隈未亡人は横浜は地震と津波と火災にて全滅したりと伝え聞き安閑として居るに忍びずとて、此日朝六時に家を出て二日分の糧食を携帯して横浜まで徒歩の覚悟にて來りしが、此日初めて新宿より子安まで貨物列車ながら開通を知り非常な混雑と困苦を冒して子安に着し其より三里徒歩にて全市焦土と死屍の間を縫

い歩き根岸に達し此海岸一帯が住家と樹木の依然として存在せるに却って驚き又一同と無事の顔を合わせ非常に喜ばれたり。女の身で此非常時の冒険旅行は並大抵で出来ない事で実に感激に堪えない事であった。

当夜地震五六度あり一同安眠に苦しむ。

八日

午前八時頃文部省属官川原與作。四方田三四郎の兩氏根岸の宅に来る。兩氏は昨七日午後四時品川を發し夜半飯県庁まで來り、其処で一泊し県吏の案内にて來邸したのであった。

横浜高工の消息が詳かならず、特に校長の身上が氣遣はれたる為め、慰問使となつて來つたのである。先きに知事を経て呈出したる震災報告書はまだ本省に達せぬものと見えたり。

朝飯を饗し十時頃相携へて焼け跡の学校視察を終り職員一同の安否をも知り午後一時兩氏学校を辭し帰京の途に就く、余は兩氏を久保山まで送つて相別る。

是より一本松の長興氏邸（長興氏は茂木氏經營の七十七銀行の専務たりし人）に避難し居ると聞きたる増田増藏氏を訪れ、其より水道貯水池の下にあるテニスコートに小屋を作り其処に避難しつつある中村房次郎氏を慰問す。

中村氏は大正九年の財界恐慌時代に増田屋と共に倒産し、爾來市の表面より隱退し居たり。余は大正二年以來特に懇親の間柄なりし。

此時中村氏は天幕様の小屋から出て來り、「今や我横浜は全滅して誰も裸になった、我れも今から裸一貫で出でて働き市の復興の爲め全力を盡さん」と語られ意氣昂然たるものがあつた。余は大に共鳴して別る。

其より坂を上り貯水池を見る。コンクリートは全部龜裂して貯水は枯れ底に僅かに残れる溜水を長い綱の釣瓶にて水を汲み取り居る人々あり、又濾過池の方では人々行水をしつつあり。老松町から野毛坂を下り更に坂を上りて宮崎町に至る。宮崎町三六は棟一の住宅のありし処なるが焼瓦の外何一物もなく、不動尊の絶壁も崩れ落ち何処が何処やら方角も立ち兼ね茫然たり。再び野毛坂を下り脇道に入ると其処にも此処にも死屍が横はり居れり。特に初音町に近い広場には二百四五十人の死屍あり。此処は広場である爲めに安全なりと其処に集まり火に包圍せられて脱出の途なく焦死したるものなるべし。最早一週間を経たることなれば臭氣甚だし。其等を十人位づつ一處に集め焼残りの材木にて上からトタン板を以て覆ひ火葬に付しつゝあり、平素なら火葬の臭氣が僅かにても鼻を襲えば、忽ち食氣を損ずる習ひなるも此非常時には死屍の臭も火葬の臭も別に氣にとめず平然と、其等の辺にて休息し水筒より水を飲み渴をいやす。

九日

逗留中の山隈未亡人は東京の留守宅は女中のみで気にかかるとして今朝出立す。婆やと芳子の兩人は未亡人を横浜駅まで送ると同行す。此処から駅までは二里の距離であるから徒歩では容易の事ではないのである。未亡人は手拭で姉さんかぶり髪はスゲ笠芳子は海水麦ワラ帽子で何れも脚半と足袋たびはだし跣足である。余は海岸に出て此三人が巡礼姿に見えて感慨無量、其八幡橋の方面へ遠ざかり行くのを見送った。

夕方に兩人帰宅す。婆やの話に三人で正金銀行の外側の死屍を見た。自分は二目と見られなかったが、山隈さんとお芳さんの兩人は平気で何時までも見て居たとて小言らしき話をしきりにした。

終日家居す。來訪者多し。其内には日本カーボン社長近藤賢二氏、市会議長平沼亮三氏及左
右田喜一郎等あり。

十日 雨天

大山・小林兩書記と約束あり、共に文部省に行かんとて早朝家を出で八幡橋近くの莫大小会

社の付近まで行くと、学校より自転車の小使來り、今日雨天であるから明日に見合わせては如何との事なれば同意して帰宅す。

十一日

一平常なれば今日は第二学期の始業日である。

朝七時家を出て日本橋まで行く。大山・小林兩氏橋畔にて待ちつつあり。相伴って久保山を越えて横浜駅に至る。東京行きの連中は駅に充満して居る。無蓋の貨物列車に乗るに、ホームが無いのであるから余の如き肥満ものは上から引き上げ下から押し上げて貰はなければ乗車が困難であるから中々の苦勞であつた。

やっと九時五十分に発車した。立錐の地なき立った俣で下に屈む余地なく上からは残暑の酷しき日射に一段の窮屈を感じず。東神奈川に至ると脱線事故が起り、一時間半立往生をした。品川駅にて山手線に乗換え、池袋駅に着いたのが午後二時過ぎであつた。先ず駅頭の水菓子屋にて休息し昼弁当を食す。サイダーあり、梨あり、西瓜あり丸で横浜と様子が違うので、全く極樂へでも來た感じがした。生來サイダーを嗜好しないのであるが、今日は全く別人の如くサイダーの美味を感じた。

其から徒歩で文部省の仮事務所へ行った。仮事務所は大塚の高等師範学校であつた。午後三時であつた。

次官や局長を初め他の人々に面会して、横浜の様子を知らせ又先方の様子をも聞いた。

猶明後十三日には罹災の直轄学校長会議があるとの事で、東京との往復は不便極まるのであるから、十三日まで東京滞在と決した。

友人川上常郎氏は小石川植物園の側にあるので、高師より至極近きを以て夕方同氏の邸を訪ひ一泊す。川上氏は宇摩郡長須村の人にして朝鮮平安北道知事を経て、当時東洋拓殖の理事たり。此処にて牛肉を始め色々な御馳走になる。横浜は丸焼けて東京はまだ可なりの焼け残りがあつた。ある為め食料品は比較にならぬ程豊富である様である。友人武川馨君は本郷の家を焼かれて当川上邸に避難して居た。

十二日

朝八時川上氏邸にて弁当を作って貰ひ携へて出立す。小石川白山御殿町で第一高等学校教授菅沼市藏君を見舞う。夫婦共在宅にて大に喜び祝杯を擧げてくれた。菅沼君とは仙台第二高にて数年間同僚たりしことあり。其から程遠からぬ片山正夫君を見舞う。余と帝大理科の化学の

同級生であつた。現東大教授である。此処にて昼飯を食す。其より仙台第二高校長中川先生及東京高工校長手嶋先生の兩未亡人を見舞ひ、本郷帝大の焼跡を見て、終に湯島天神の境内に入り其処より下谷本所深川方面の火災地を瞰望す。眼の届く限り焼野原となつて居るが、それでも所々煉瓦や鐵筋建造物は可なり建つて居る。此から見ると地震の強さは横浜の方が遙かに大なりしことを証す。

本郷の帝大などは貴重な資料が保存せられしものなりしが、多くは焼失した。帝大の職員學生等が今少し奉公の志があつたなら、斯かる損害が減少せられたであらうと考えられる。

本郷通りに出で磯田氏を訪ひ春日町まで行き、其処から電車で水道橋に至り、其処から徒歩で飯田橋まで行き飯田橋から電車で若松町まで乗り若松町から徒歩で新宿を経て夕方代々木の山隈芳枝さんの宅までたどり着き、久々にて入浴一泊

十三日

朝西瓜の御馳走になり七時半に山隈さん宅を辞し前日の途を辿り春日町に出で、其処から電車にて高等師範の文部省事務所に行く。電車も汽車も無賃であるから、東京へ來ても実に金の入用が尠い。

まだ時刻が早いから又川上氏邸に立ち寄り砂糖するめ片栗粉など貰い受け携へて文部省仮事務所へ行く。

午前十時半より罹災学校代表者の会議を開く、可なり多数の出席者あり、余は横浜の状況と学校罹災の様子を陳述し仮校舎の急造と授業開始の一日も速かならんことを欲し此が横浜の銷沈したる人氣を回復する所以なることを説く。

正午過ぎ弁当を食し其俣辞して帰途に就く。池袋へ出る途中にて海苔の佃煮缶詰八個と砂糖豆一斤とを買う。途中は焼けない為め横浜と違い相当の物資を販賣し居れり。

横浜駅より此等の荷物を携帯して徒歩にて全く疲れ果てて午後六時頃帰宅す。

横浜駅よりの途中中村橋付近にて地方より帰り來た一学生に遇う。梨数个をくれた。其姓名を逸したるを遺憾とす。又根岸橋を渡り暫くすると左右田喜一郎氏と棟一とが後より來るに会う。荷物を分担してくれて大に助かった。喜一郎氏は一兩日前から余の宅に泊し宅は氣持が良から当分宿泊すると喜ばれた。

棟一及武夫も來泊するので可なり賑やかである。

十四日

時々大きな夕立が来て如何にも荒模様である。午後一時より職員会議を機械科職工控室にて開く。此控室は僅か三間に四間位の獨立したる建物であるが、震災により壁に亀裂も生じない位完全に又全く火災をも免れたるは実に不思議なる程である。

會議は先ず余が文部省に於ける罹災学校會議の模様を述べ、本省より我高工の救助は迅速に達成し難き状況なるを以て、是非我等は協力一致して單獨にて本省の力を当分求めず授業開始の方策を講じ度く、其れには先ず三年級の応化及電化は東神奈川の浦島町にある横浜舎密研究所を借り受くることを相談し、一同之に賛意を表せらる。

舎密研究所は大正四年、余の建案により中村房次郎氏の経営にて創始せるものにして、余は所長として又富山保氏は主任として化学工業に関する研究をなす処にして、大正九年増田屋が財界恐慌の爲め失敗後、原富太郎氏の出資経営にて今日に至れるものである。

十五日 雨天、風稍強く荒模様

風邪の気味にて臥床

十六日

風邪猶未だ全快せざるも、前日職員會議の決議により研究所使用の件に就き承認を求むる用あるを以て、午前九時出立して三溪園に行き西郷健雄氏に面会して其了解を得たり。幸にして中村房次郎氏も來会するに際会し、同様了解を求めたり。其より市役所及県庁に行き更に東神奈川に赴き研究所にて富山氏に面談し、研究所使用の用談を終え日暮れて帰宅す。疲労甚しく発熱し臥床して夜半に至るまで眠られず。

今日市中を見物すると震災後、余程改善せられたるを見る。横浜駅より久保山一帯を通行して見ると、大根や蕪などの野菜類を始め又食物としてはシルコ、スキートン、スチユウ等一杯五錢乃至十錢の安物が可なり道傍にて売られて居る。此等些細にして貧弱極まるものを見ても、復興の気分が何処となく湧き起りつつあるを見られ気分を強くするの感に堪えず。

猶本夕七時学校へ桐生高等工業学校より使者数名來り白米三斗を見舞として贈らる、且つ伝言して曰く、

災後二週間に及ぶも横浜から一切通信がない、ところが長崎の高等商業学校からの便りでは鈴木高工校長は震災で重傷を負ったとの事であるので、取り敢えず西田校長の命で御見舞に來た。と、

今回の様な大天災では種々な流言飛語があった。市中知名の人々の身上に就いても当時市内

に在留せず旅行不在等であった人々には、大抵種々の噂が伝えられた。余の身上に就いても同様で横浜高工が焼け校長が焼死したとか圧死したとかの風説が弘明寺町の膝下にまで起つてそれが東京にまで伝はり、態々見舞に來て呉れた人もあった。地震の当時余は校舎内に踏み留まり容易に校舎外に逸出せざる為に人々から心配せられたことが此等の風説を生む基となつたものと思う。

十七日 晴天 秋日和

今日は東京へ行き文部省へ出頭の筈なりしも風邪猶全快せざるを以て、終日床中にあり色々な事を回想した。

震災後既に半ヶ月を経過した。あの当時教務室にて突然の大震に横地君の地震じゃという一言から室内の混乱、家屋の動揺から室外に出でんとした努力から廊下の倒れかかった様子などまだありありと記憶に新なるも、余りに大事変であつたから又一方には夢の様にも感じる。

学校からの帰途山上の英和女学校の校庭に立ち、眼下に全横浜が火の海と化したる凄状を只茫然として見て只感慨無量であつた。其時期即ち午後七時前後には正金銀行の外郭や内部にて無数の若き人々が火熱地獄に苦しみぬき、其果ては燃えて相重なりつつ死んだ。其他の場所

でも火の地獄の連続で二萬幾千人が市中だけで死んだのであったが、自分は何等其の様な事を想像だも致さず根岸の自宅に急いだのであった。

自分の歯疾の爲め山下町の歯科医に就き、齒を若干抜き取り休み中に入齒をする筈だったが、歯科医が東北地方に旅行をして留守で、篤と其婦浜の日を確實に知らぬ爲め段々に延びたが、最早夏休も終りに近づいたから九月一日よりは非山下町に行かねばならぬと思つて居た。

歯科医に行かなければ夏休中は大抵午前十一時過ぎから本町の弁天橋畔の銀行集会所に行き、暫く玉を突き正午食堂に行くことを例として居た。処が山下町の歯科医は岩崎という人で宅は古煉瓦石造で其二階に治療室があつた。此山下町は煉瓦石造の家屋が多く爲めに全部崩壊して半数の住民が死んだ最も悲惨を極めた処であつた。若し余が此処に行つて居たなら必ず圧死したであらう。又銀行集会所に行つて居たなら同様の運命を逃れ得なかつたであらう。

幸運にも九月一日の此大災難の日に限り、此の兩所の何れにも行かず、学校に居て其学校の最後を見届け得たのであつた。其れには次の様な事があつた。

直轄学校では自動車はまだ殆ど所有して居らなかつたが、横浜では一台欲しいと思つて其趣を自動車通の松浦という友人に話をしておいた。暫くして松浦博士から八月三十一日は祭日で休んで居るから、格好の自動車があるから見に来いという知らせがあつたので午前中中野町の

同氏の宅を訪ひ、其から長崎村に行き其車を見て約束をして歸った。

翌一日には此車の購入手続きの爲めに学校で多少の間を取り其から教務室で新内閣組織の談義をした爲めに、余の平素の日常行事の日程に時刻の差が生じた爲めに一身の厄役を免れた。此も不思議な運命であつた。岩崎医師の処では岩崎氏を始め助手看護婦全滅という有様で、其後多少の治療代支払の爲め探索したが何事も知れなかつた。銀行集会所でも早く走り出したものが助かつたが、二階の食堂で食事準備中の者は圧死の最後を遂げた。

幸運であつたのが散髪屋の倉林で地下室で一本の丸棒で片手を圧せられ午後に至り火災の來る間際まで其丸棒を齒でかじり遂に逸出して助かつた。

余は実に危き運命の下に無事であることを得た。若し自宅に居たとしても、書齋に居たならば書棚の転覆で多少の負傷位はあつたと思う。何れにしても幸運至極であつた。

学校に出勤中であつた爲めに校舎の焼け初めから最後まで見届け、其報告書まで実地の俣出來た事は、何よりも満足至極で精神的に又大に得る処があつた。

恐ろしい地震と火災の第一日は去つた。何十万人という人々は追ひ來る猛火を避け逃れつつ安全な場所を求めて悲惨極まる地獄の苦をなめた。而して数万の人は水の中で又陸の上で死んだ。こんな慘事は世界の歴史にも稀れな事であろう。東京と横浜と横須賀で死んだ總人数は拾

四五萬人であるとの噂である。又物資の損害は五十億円という、或は百億と見積る人もある。日清日露の兩戦争を合しても此一日又二日で消滅した人命と物資の損害に及ばぬ計算である。

人間は自然を征服すると云って近代の文明は人間をどれだけ高慢自負に流れしめたか知れない。金力萬能と世間の成金連中は近來どれだけ其弊を世道人心に悪影響を及ぼしたか、又一流の智識階級の人が他人の妻と情死しても恋愛至上を武器として之に同情もし、又弁護する世の中となった。日々に新聞紙上に顕れて來る姦夫や姦婦は何れも愛人という美しき名になった。道徳的には全く無政府の感を起さしめる。同時に又忠君とか愛国とかいう説明も次第に難しくなり、極端に西洋風に又個人的に走りつつある。世界戦争後の我国の平和論や民主主義や社会改造論者は、慥に我國民を外道に導きつつある様に思はれ此先き我国が如何に成り行くかが案ぜられた。

果然大地震（大火災）により自然が一瞬の間に揮った鐵槌は忽ち東京と横浜との二大都市を廢虚にした。人力が如何に微弱なものであるかを実に痛切に感ぜしめさせた。此が所謂天の降す罰である。恐しき罰であると思う。財界其他に於いて畏敬せられる澁澤青湖翁も此頃天罰論を唱へて居るのである。

ここで人間が高慢な鼻を折りて謙遜となり、奢侈の惡風を矯めて質素となり、不徳より道徳

に不倫より人倫に転換すべき一大時機に会したとも云うべきであろう。

此の様な考へが震災の当時より余の頭腦を全く支配して來た。其処で又一方横浜全市の荒廢の跡を見ると一種の昂奮を感じずに居られなかつた。此の如き大事變に際し一点の失望落膽又阻喪することなく、一氣復興再建に邁進することは国民の大覚悟でなければならぬと考へた。

取りわけ自分としては我高工を眞つ先に復興せしめぬばならぬ。而して其覚悟を示すことが多少にても此際光明を市民に与えるものと考え、銀行も会社もまだ開業の一広告も無き去る十五日に横浜駅・馬車道と日本橋の三ヶ処に横浜高工は仮校舎を急造し成るべく速に授業開始すべしとの立て札をした。

此には多少の決心を要するのであるが、同時に是非自分で努力して開校せしむると云う自信もあつた。斯くして僅かでも市民に復興の勇氣を与えたのであつた。

復興の勇氣も在るものながら、震災の生んだ悲惨の事柄は述べるまでもない。有りとあらゆる凡てのものを焼き盡し一家全滅し全滅しなくも杖と柱と頼むものに死に別れ全く途方に暮れるものも可成り多いのである。震災三日目の夜から我々の家にも玄米の粥を食する様にした。当時他の悲惨なるものを目撃しては其さへ満腹して食するに忍びなかつた。

過度の歩行奔走と減食とは自分を可なり疲労せしめたから此十五日から人並に食事をするこ

とにした。

此頃から東京や他方から来る知人や学生は梨・野菜・菓子・牛肉等を持参して慰問してくれる様になった。中には学校の焼けた位は何でもない、校長先生が無難であったことは何よりも嬉しかったことである。と眼に涙を一杯にして居た学生もあつた。又遠い処から難儀な長旅行をして学校や校長を見舞に出て来てくれた人もあつて人情の美しさに心から感激の情に打たれることもあつた。しかし又他方には反対の事もないこともない。

研究所の一所員が研究所の一部が焼け、正に他の部分へ燃え移らんとして居るのを傍観して防禦もせず研究所の物品が盗まれんとしても一向に之を顧みず、自分の所持品をかき集め人足の手のなき処を研究所出入りの者を欺きて其荷物を埠頭まで運ばし妻子を船に乗せ郷里に帰つた者があるとして研究所から余の許に報告があつた。

此も別に悪人ではなかるうが人間の世の中は千差萬別である。

十八日

本日猶不快につき休養す。

十九日

午前学校へ行く。十一時頃本省建築課長柴垣氏來校し、学校の被害程度を檢分す。其より大山書記を加へ三人にて関東学院を初め市内の建築物の被害の状況並に横浜港内に於ける倉庫の被害等を調査し、更に東神奈川の研究所まで行き此処にて別る。

子安より京浜電車が通じ居り神奈川まで乗車す。久し振りの電車にて実に気持ちよかりき。神奈川より大山氏と徒歩にて久保山を過ぎ道傍に休息し大山氏と一杯五錢のスキートンを食したり。夕七時頃漸く帰宅す。

二十日

此頃になると萬事不自由や労苦にも慣れて來たので、三里や五里の歩行も別段苦勞と思はない。宅から学校までは約一里横浜駅へは一里半、東神奈川の研究所までは二里半、市役所や県庁は桜木町駅付近にあるので約一里半程の里程である。毎日跣足袋に竹の杖をつき其等の間を往復した。又必ず握り飯二個と茶を入れた魔法瓶を携帯した。暑い日中には額から汗がポトポトと流れ落つるが、それ位の事は全く平氣になった。

食物の不自由は更でない。只品質が下落した位である。震災の前日に米屋から白米二斗を届

けてあったが、猶不安を感じたので三日の日に懇意な加藤という学校付近の農家から玄米二斗を取寄せて置いた。其からは青年団から配給を受けるので今は荅石二斗位になった。避難の人々にも分配しながら又大家内でありながら米には全く心配がない様になった。

砂糖も赤砂糖と合わせて二貫目位を持ち合わせたので平素の四、五倍位豊富になった。学校にフォードの自動車が焼けずに残った。車体がなかったが之を芝生の青年団に貸した。青年団は板囲ひをして分配品の運搬に使用した為め、非常に利便を得たので青年団から大に感謝せられた。

又宅には梅干が二斗位貯藏して居った。梅干は古いものが善良である。何か一朝事あるときは梅干は必要のものであるとて、死んだいよ子は毎年梅干を若干づつ製造して居った。

正月の餅も注文せずに宅で搗けとて白や杵も備えて居ったが、其器具は今度は米つきに役に立った。此二件は今回の事変でいよ子に感謝せずに居られなかった。

事変以來最早三週間を経過した。家内一同は何も不自由なしに衣食した。鶏もカナリヤもオームも無事で生きて居る。只哀れを止めたのが金魚のみであった。庭の泉水に百数十匹の金魚が居った。毎朝余が池辺に立つと餌の催促をして集まり來ったものであったが、地震で過半は庭上に振り出された。宅の者が見付けて再び池中に入れたが災日の夜中に泉水のセメントが亀

裂して居ったため池水が漏れ去って一匹も残らず死滅した。

二十一日

東京へ行く。最早汽車も東京駅まで開通して、其上二等車まであった。東京駅の裏手の呉服橋から大塚行の電車もあるので、安々と大塚の高等師範の文部省の仮事務所まで行けた。同処にて實業局長に面会すると意外千萬な事を言達せられた。

名古屋市に陸軍幼年学校があったが、前年廃校となり其校舍は其俣不用になって居る。それで名古屋市と愛知県庁から、それぞれ理事者が上京して罹災の直轄学校の一つを引受けるというのである。其処で文部省では我横浜高工を名古屋へ一時移転せしむる事に決した模様である。それは意外千萬の事であるとして承諾を與えなかった。然らば文部次官まで來れとて、局長に伴はれて次官に面会した。次官は横浜は震災の被害特に甚しい、罹災民の住宅は最も急を要す。学校の仮校舍など後廻しにすべきである。学校はひとまづ名古屋に移転すべしと切論す。

余は非常の此際名古屋移転は或は御尤の次第なりと考えるも、今横浜唯一の直轄学校が一時たりとも他所に避難する事となれば、一面に横浜市には不利又他面には市民に精神的打撃ともなるべし、如何なる困難にも忍耐するから是非横浜に踏み留まりたき旨を陳述す。

次官聴き入れず帰って考えて見るといふ。余慨然として去る。

余は学校創立の任に当り、同時に横浜市の爲めに微力を盡して來た。横浜の一角に工業を守護して居る身分で、一朝天災の爲め市が全滅したりとは云へ、其復興の大任は自然と我校に降りかかる氣分に燃えざるを得ない。

此の大天災を体験しながら又市民の四苦八苦を眼前に見ながら、仮令冷然でなくとも、之を振り棄てて上司の命令なりとて、悠々と職員と学生を引き連れ名古屋に行けるものであるか。よし名古屋へ行き無事に其職責を果したりとして幾年の後何の面目あつて再び横浜に帰り市民に見ゆるを得んやである。男子の氣節も教育の信念もあつたものではない。文部省の行政官吏などは憐むべき人間の屑であると憤慨せざるを得ない。

愈々強制命令が下れば辭職の外なしと覚悟を定めた。

文部省を去つたのが午後四時二十分であつた。雨がバラバラと降り出した。電車で水道橋を経て若松町で下車した。其から先は電車が不通であるから徒歩による外ない。新宿近くに來ると篠つく様な雨になり徒歩も困難な程で全く濡れねづみの様になつた。路傍の小屋に休息して店頭にあつた鐵砲ずしと餅のない汁粉一杯を食して夕食代りにした。

雨も小降りになつたので又歩行を始めて午後六時半代々木山谷の親類山隈芳枝未亡人の宅に

一泊した。

二十二日

朝起きて見ると雨が猶降り続いて居る。朝食後、握り飯を貰って七時に出立した。今日は亡妻いよ子の命日じゃ、大正七年から月の二十二日には家内の誰かがお寺参りをした。今月は市の寺々は皆焼けた。留守の者もお寺参りの事を思い浮かべて居るならんと想像した。

八時頃麻布三河台の大藏大臣井上準之助氏邸を訪問した。跣足袋で訪問した。案内せられたら如何せんと思案して居ると、玄関子が来て只今長引く來客中であるから十二時半から一時半までの間に日本銀行まで來れとの事であった。依って此処より遠くない氷川町の日本銀行理事深井英五氏の邸を訪問した。さいわい深井氏は在宅であったので面会して先刻井上大藏大臣を訪問した、其用件は罹災の横浜高工復興予算の成立に大臣の了解を得る為めであった。何卒貴下よりも大臣に微意のある処を御願下され御力添えを願いたいの事を云々した。一時間半程も会談して、其れから赤坂溜池の廣瀬新氏を訪問した。廣瀬はいよ子の従弟である。行って見ると廣瀬の家が焼けて其跡に焼けトタンの小屋を作り降りしきる雨の中に悄然として居る。聞けば妻君は圧死したとの事で、悲惨極まる状に実に気の毒な思をした。

それから虎の門に出で電車で日比谷に下車した。公園の避難民の状を見て東洋拓殖会社に行き理事川上常郎氏其他に面会し正午頃日本銀行へ行った。日本銀行も焼けて居るので其焼跡の営業であるから尠からず混雑して居る。此処で握り飯の昼食をした。

午後二時になつても井上大臣の顔が見えない。出勤をして居る深井理事に頼んで大臣に伺ひを立てると大臣は最近まで日本銀行総裁であつた為めツイ大藏大臣官邸を日本銀行と間違えての返事であつた事が判明した。且つ二時半から枢密院会議へ出席するから、今一度出直して来てくれとの事で致方なく日本銀行を辞去した。門前で行員の友人佐々木多門君に出会い相携へて東京駅まで来た。駅前の丸ビルにて多少の食糧品を購ひ夕方帰宅した。

正午頃より雨止む。

二十三日

屋根屋が来て瓦の葺き直しをする。学校へ行き午後は市役所へ行く。商業会議所にて会頭井坂孝氏に面会し、昨日文部次官の余に提出したる内旨を告げ、且つ余の決心を語る。井坂氏大に賛意を表す。

二十四日

朝雨中を本牧三溪園に原富太郎氏を訪問す。

原氏は今度出來た横浜復興会の会長である。

要件は高工が本市に於て是非復興すべきである趣旨に付き諒解運動である。原氏は素より大賛成である。

午後学校に行き職員會議を開き、文部次官の内旨を伝え余の決心を陳述す。一同同意す。

風雨止まず全身濡れて夕方帰宅。夜に入り雨猶止まず。

前日の屋根修理は奥の六疊二間のみにて他は未だ落成せず。其二間には佐倉の聯隊兵が九名宿舎し其処は雨漏れなきも、他処は何れも雨漏れ甚しく夜中寢所を移すなど迷惑したり。それでも他所の不完全なる急造バラックに比し如何に有難きかを感じざるを得なかつた。

今日初めて郵便物の配達を受けたり。葉書三本にて何れも震災の見舞状にて、内一本は九月二日発信のものであった。

二十五日

午前十一時より職員會議を開き、授業開始の諸準備の相談をする。

午後市役所に行き市長渡辺勝三郎氏に面会し、高工復興に付き文部省の意向を開陳す。市長曰く「若し本省が強行に移転を命令せば如何」と、余曰く「辞職あるのみ」と。市長は「然らば市会に提案して移転反対を議決して本省に陳情せん」と。

本日午後東京日日の岡實博士及渡辺鍊藏博士の兩氏見舞の爲め学校へ来る。不在にて面会せず。

夕方市役所を去る。中秋の明月皎々として焦土の市を照らし、徒歩にて帰る。余に物の哀れを感じしむ。

今日郷里伊豫よりの初めての書信に接す。九月二日の発信。

二十六日

午前学校、午後市役所。

文部大臣へ提出の高工名古屋市へ移転の反対陳情書には市長渡辺勝三郎・商業会議所会長井坂孝・市会議長平沼亮三。復興会長原富太郎の四氏連署す。

本日熊本高橋町田中ツル子より初めて書信来る。

二十七日

本日東京へ行き文部省にて前日の上申書を粟谷局長へ提出し、大臣へ伝達を願う。且つ付言す。

「私は震災にて危うく命拾ひをしました。高工が名古屋へ移転するなら市民から竹槍でやられる筈でした。折角命拾ひをしたのですから竹槍は御免です。」と。

日暮れて家に帰る。左右田棟一氏の一家七人鵠沼より帰り、根岸海岸の当宅の付近に借家して一先づ落ち付く。

二十八日

学校にて職員会議を開き、名古屋問題他を報告し且つ今後の対策を評議す。

二十九日

快晴にして秋涼の氣壯快なり。裏手の山を登り根岸競馬場より市内に出て関内の諸銀行開業の状況などを視察しつつ市役所へ行く。

市長は明三十日の市会へ高工の名古屋移転不可の議を提出し、且つ決議するとの事。

余は更に横浜は孤立せず情報員を絶えず東京へ派出し東京の状勢を詳にして置くこと、又此際 宮殿下の御一方なり御二方なりの御邸宅を当市に置かるる様、宮内省へ歎願するの件を市長に建言し、更に神奈川町に行き、貿易新聞社長三宅氏を其私宅に訪ひ右の兩件を謀る。同氏大に余の意見に賛同す。

其より県立工業学校へ行き、秋山校長に面会す。其校舎の幾分を借り入れ度き希望の処、震災の損害程度無数、到底使用に能はずと断す。

其より大和鉛筆会社、研究所、日本カーボン会社をも訪ね、夕方帰宅。

今日にて屋根の修繕を終る。最早雨降りても大丈夫となる。傾きたるを直し多少のハスカイ等を施し約千五百円を要したり。

三十日

青年団へ貸したる自動車学校へ引き取る。

正午過ぎ廣田神戸高等工業学校長來訪あり、廣田氏は茅ヶ崎の別邸にて地震に逢い、九月四日横浜港より船にて神戸に帰任す。氏は裁判所の焼跡にて一夜を明かしたが高工を見舞う事が出来なかつたので、船中にて横浜高工は全滅し鈴木校長は氣の毒にも圧死したと云う人が二人

までであったので非常に心配して神戸に上陸して早速他所へ問合せ校長の無事であったことを知ったとの事を物語りせられた。

午後二時より復興会の初顔合せあり本町焼跡のバラックにて集会し、原富太郎氏の挨拶あり余は總務委員となる。

本日横浜市会が開会せられ横浜高工の名古屋へ避難することの不可を決議す。名古屋行も段々と其声が大きくなり終りに市会の問題とまでなりたり。

震災も最早一ヶ月を経過した。今日復興会に出席した者は百名近くあったであろう。何れも我横浜市の錚々たる人々である。併しお互いに顔を合して其服装を見れば惨たるものである。汚れたる背広、キャハン、跣足袋、襦袢の上から直ぐ外套など種々様々十人十色の状態である。富豪も一日にして家を失ひ衣類家具を焼かれ、店を焼かれ、会社銀行を焼かれ僅かに身を以て逃れた者は先ず仕合せの方で親や妻や子供を失ひ途方に暮れる者も数限りない程である。今日では横浜の人々は先ず乞食同様と見らるべきである。

今日も中村町を通行すると全国各地から來た慰問品分配を受取る為め長い長い行列を作つて居る。其行列は老幼とも女が多いが中には若い男子も交つて居るのが見受けられた。

余の宅にても毎日何か多少の慰問品を貰うのである。行列の後に続いて貰ったことはないが、

青年団から態々届けてくれるのである。

二三日前にイリ豆二合程木綿袋に入れたものが届いた。香川県三豊郡笠田村高橋磯吉氏からの慰問品であった。余の故郷を去る僅か数里の近傍の人であるから特に嬉しい感じがあった。今日は又新しい綿ネルと縞の袷が来たので婆やと芳子が貰った。

余等の所在地根岸の芝生は火災に遇はないので一番有難い場所じゃ、実際に慰問品の必要がない、それでも青年団は罹災民として色々な慰問品を運んで来る。而してそれを適当に分配する。芝生では地震成金が出来ないとも限らない。

震災一ヶ月は夢の様に過ぎ去った。九月一日と二日との恐怖すべきあの凄惨な空の模様や地面の有様は一生何として忘れられよう。此の恐怖の日に官庁にて死者の筆頭は郵便局の百七十人、裁判所の六十人、其他税関、県庁、市役所、銀行、会社何れも多数の死傷者を出して居るも、我高工は小使を合せて丁度六十家族があり一家四人とすれば二百四十人の人数になるが一人の死傷者もなかった事は自分ながらも不思議に感ぜられる程の幸運であった。併し焼き出されたものは八戸であった。

家を焼かれた人々の多数は縁故を辿りて地方に散じた者が多い様である。残った者は焼け残りの材木やトタンを集めて雨露を凌ぐ小屋を作った者も尠からずであった。一ヶ月前の当時の

印象はまだ生々しく二人集まっても三人集まっても災難の物語りは、何時までもくり返されて居る。一家全滅に近かった人も自分の不幸を笑って物語って居る。泣きつつ物語る人は實際稀である。泣いて不幸を告ぐる人は此一ヶ月間に二人の婦人があったのみである。或悲哀の程度を超過したり、共同の災禍に出会したものは單獨に遭遇した悲哀とは人間感情の異なるものがある様に見える。

(本日誌は紙片に記録し置きしものを此冊子に再録したり、後日に保存せんが為めなり。)

附記

横浜は僅か二十数年の間に二度全市潰滅した。其都度余は親しく其惨禍と其経過を目撃した。兩度とも余の邸宅は罹災を免れたことは非常なる幸運と云はなければならぬ。

震災は予期せざる瞬間に起り倒潰家屋のありし各所に火災を生じ、数時間にして全市を火の海と化し目も当てられぬ惨状を呈せしめた。家屋の構造と種類を問はず被害は一般であった。

戦災は多少震災と其趣を異にせり。一ヶ年に近き空襲は市の一部を幾回にも涉り破壊したり。二十年五月二十九日の大空襲は市の大部分を焼き拂いたり。然れども不燃性の大建築物にして直接に爆撃を蒙らざるものは其災禍を免れたり。猶傾斜したる家屋もなく地面の亀裂や水準の変化なき為め、震災よりも程度の深刻なるものなしと云うべきであった。蓋し人心に及ぼす影響に於ては、其兩者に於て非常に差異ありと云はざるべからず、少くとも余に於て然りである。

大正十二年九月一日より翌年に至る一ヶ年間は余の生涯に於て、最も努力し又最も働き甲斐ありたる会心の期間であった。焦土の中から横浜復興の青年が輩出するならんと希望に燃えて力一杯活動した。前途に光明を認め自信を以て活躍した。今から考へても其当時は懐かしい。横浜人士も震災当時は何れも志気旺盛で張り切って居った。横浜復興まではと衣服を始め冠婚葬祭の儀礼まで簡素質實の申し合わせまでして勇往邁進した。併し一年ならずして段々と士気が崩れて来た、馬鹿正直に頑張ったのが我輩一人であったのかも知れない。

空襲には初めから何等の希望も光明もなかった。敵機は自由に帝都や浜の空を飛んで爆弾を投下した。味方の空軍は如何ともすることが出来ない。陸上の高射砲は射撃はするが更に命中しない。空襲の始まった頃から勝利の見込みは少なく、当局は一億一心とか何とか色々な宣伝

語を以て戰意昂揚や生産増加の方を講じたが、何としても国民は意氣消沈して反響が尠かった。八月十五日の終戦と共に全く異なりたる日本と化した。忠君愛国は何処へか去ってしまった。大和魂は消えてなくなった。軍部の貯藏物資は食糧、衣料、金属品、ガソリン等は軍人により軍属により其他の人により勝手に隠匿せられ全く火事盗人となった。時日が経過するに従い挺身隊の復員したる者さへ盜賊と化するに至った。此等隠匿物は幾百億円又千億を超へ、インフレーションに大なる拍車を加えた。忠勇なる武人さへ其有様であったから餘人は押して知るべしである。官公吏を初め警官まで闇の商人と結託して悪事を働く状態は、所謂百鬼夜行其ままで全く無政府の状態を呈し、政府又如何ともする能はざる態となった。

今にして回顧すれば（敗戦の跡を）国民の教養の低調なりしことと国家が苦勞を知らなかつた事に今更の様に目を醒さざるを得ない。

余の如きは戦時中は止むに止まらず隠遁の身を再び起して、東奔西走して士氣鼓舞に努め必勝懇談会を設立して百数十回の講演をした。

併し今にして考へて見ても聴衆を欺いたと云う感じが無い。總ての講演は全く良心的に行つた。其れが為め必勝懇談会が発行した印刷物などは当局の忌避に触れたことがあつた。

新聞への投稿は没書の厄に遭つた。それにしても戦争に敗れ国民に最大の迷惑、苦勞、困窮、

恐怖を与えたということを想起すると、実に自責の感に堪えない。何を以て県民や市民に對し得るやとさへ思はれる。

月日が経過すれば自然と自責の感が薄らぐかと思ふと左様ではない。久しく郷里にも帰省しないが故郷へ帰るのは恥を裏んで帰る思いがする。何の顔あつてか父老に見えんやである。

明治大帝と忠勇無比の先輩志士に依つて建設せられたる大日本帝国は根底から覆された。東條其他の為政者にのみ責任を帰せしむるのは卑怯千萬であらう。我々も責任を負担して国家再建に一段の努力をすべきである。世界に未知の一島国から起り、八十年間に一大強国となり世界を相手として十年近き長期戦争に耐えた。敗れたりと雖も又以て慰むべきものがある。

軍備なき国は仮令獨立を得ても眞実の獨立国ではなからう。一種の不具国家である。不具であつても立身出世の途がある。則ち文化国として列強に伍する途がある。教養に欠けたる国民であり苦勞を知らなかつた国家であつたと云う自覺に眞に後悔の發憤をなし得ば、国家の前途は必ずしも暗黒ではないであらう。

左記五言長詩は昭和二十二年正月徳富蘇峰先生が余に贈示せられたるものにて敗戦後の世態を詳にしたるものである。

丁亥歲首有感

倉皇錢厄歲	更迎最厄辰	世局滄桑際
庸人秉樞鈞	國體喪尊嚴	上下紊君臣
產業日衰退	荒怠貪貨銀	幣鈔如落葉
物價衝蒼旻	嘯集逞強請	拳國半暴民
邪說敷海內	一掃風俗淳	苛政猛於虎
滅絕恒產人	匡濟無俊傑	神州化荊榛
浩嘆又浩嘆	與誰談經綸	

十數年にして震災逢難記事を閲讀し今回の戦災と対照し有感以上を付記す。

昭和二十三年四月神武天皇祭日

煙洲

書簡

拜啓 のぶれは 陳者九月一日の大震及大火の慘害に付き御懇切なる御慰問を忝ふし難有厚く御礼申上候。早速に当方の消息を申し上げ御同情に御答へ致すべき筈之處、爾來公私復興の事務に忙殺せられ心ならず今日まで御疎音いたし無礼御寛容被下度候。

震災の当日は恰も小生出勤執務中にて、地震の為め壁土塗れまみに相成り、幸うじて校舎を脱出したし候。同時に化学実験室の二ヶ處より失火いたし、大正九年三月落成の新校舎は機械工学科の一部を残し全部焼いたし候。私宅は損害微少にて家族又一同全く無事にて候。其後の調査によれば本校職員は家族數十にて学生は三百六十人、卒業生九十五人、此等が何れも一人の死傷も無く、横浜所在の官公庁として珍らしき好運に御座候。御安神被下度候。併し当地その他に於て一朝にして多數の友人知己を失ひしこと実に痛恨無量に御座候。物質上よりすれば横浜市は殆ど全滅と申して差支無之候。而して此の灰燼焦土の中より偉大なる横浜市を建設せんとして、目下市民の意気精神頗る旺盛に御座候。

猶小生関係の学校としては横浜高等工業学校は応急の仮校舎を設け、來る十一月一日より、商工実習学校は今日より県立第一中学校に於て、又横浜工業専修学校（夜学）も今日より高工

仮校舎にて夫々授業開始の予定にて着々進捗中に御座候。先づは御礼旁々震災近況御報道申し上げ候。

敬具

大正十二年十月十八日

鈴木 達治

右の書簡は学校の授業再開に際し、各関係の方々に出されたと思はれる謄写版印刷のもので、記録誌中にはさまっていたものです。

大正末期から昭和初頭の経済的不況もあり、横浜高工の本校舎の建設は非常に遅れ、本館の一部（機・応・電）が昭和十年末頃であったが、その後又一時中断され、更に本館完成は昭和十二年十一月名教自然碑が煙洲先生退官記念事業として建立された頃であったと思はれる。昭和十五年私の入学した頃はまだ建築科と講堂は震災後建てた仮校舎（バラック）であった。講堂が新築されたのは昭和十七年九月私達の繰上卒業の直前であった。併し間もなく此の新講堂は焼失した。此の様な事を考えると、果して名古屋移転していたら何年後に横浜に帰れたか、又帰って来ても市民に対して顔向けできないと考えた煙洲先生のご意見でバラックではあったが震災後二ヶ月で授業再開にこぎつけたという事実には文部省も非常に驚いたであらうと思う。そして此の雨が漏り月の光が射すバラックの教室から幾多の優れた人材が日本の工業界に巣立

って行ったことは皆様のよく知る処である。

(村松四郎)

あとがき

昭和六十一年に煙洲会五百回記念誌「自由の翼」を出版する際に、煙洲先生のお宅からいろいろとお借りした資料の中に一冊の古い和綴じの記録誌があった。

表紙には関東大震災逢難記事とあったので、今はもう知っている人も少い七十年近く前の大正十二年九月一日の大震災の状況と、其の後の横浜高等工業学校の名古屋移転の文部省の内示に反対して、煙洲先生の不屈の横浜復興精神を、煙洲先生ご自身の筆になる日誌によって知事が出来た。

今回此の日誌を刊行して、大震災火災の恐怖と其れに対する物心両面の用意とを認識して頂くと共に、大正九年創立後間もなく逢難した横浜高工の危機に対する先人のご努力を皆さんに知って頂くとう考えました。

今後若い方々にもお読み願うので、送り仮名その他に就て多少私の独断で字句修正をさせて

頂きましたが、度量衡の單位等でも判り難い所があるかも知れません。

尚文中左右田棟一とある方は、煙洲先生のご実弟で、東京大学ご卒業後、左右田家（左右田銀行経営者）に乞われてご養子に入られた方です。

煙洲先生は明治四年九月十一日愛媛県に生まれ本名鈴木達治（雅号煙洲）。

明治十九年より四年間、同志社英学校、その後二十三年より三年間、同志社理科大学部に於て化学専攻、副科として独逸語並に植物生理組織学を兼修して卒業。此の間優等生として授業料を免除されている。

明治二十八年一月より熊本の第五高等学校にて二年半教鞭をとり、明治三十年七月東京帝国大学理科大学化学科入学、三十三年七月卒業後同大学予科講師を勤め、三十四年二月より仙台の第二高等学校及び仙台医専の教授を兼務。

三十八年八月より広島高等師範教授、四十一年六月より東京高等工業学校教授として二年余電気化学工業研究の為、独英米に留学。

四十四年五月帰朝後同校教授。

大正六年十月、第九高等工業学校創立委員を囑託され、同九年一月に横浜高等工業学校校長に任命されている。（即ち横浜高工は全国で九番目に創立された高工ということです）

此の間に大正二年四月より十月まで休職して、西欧に出張（空中窒素固定法導入目的）。又大正八年十月より十二月末まで支那方面に出張されている。

大正十年二月、県立商工実習校長事務取扱を囑託さる。

大正十一年八月横浜市立大岡工業補習学校校長事務取扱を囑託さる。

大正十二年九月関東大震災に逢遇した。此の時に文部省の名古屋移転命令に従はず、自力を以て仮校舎を建築し十一月一日より授業再開した。此の頃の校長始め各教職員及び学生達の非常な努力は横浜市民にも大きな感銘を与えたに違いない。

昭和十年二月 横浜高等工業学校校長辞職

（先生は五十歳で校長になられ六十五歳で自ら後任校長を推薦して辞職された。）

辞職後は政界或は市長に或は同志社大学の總長にいろいろのご依頼があったが、總ておことわりして、六ツ川の山の上から卒業生の活躍を楽しみに余生を送られたが、太平洋戦争中は必勝懇談会を組織し七十五歳の身で各処に講演して歩かれたが、戦後はインフレで生活はたいへんご不自由な時が続いた。此の頃、全国の卒業生各位から煙草とか食料が先生のお宅へ届けられたことが先生の日記にも記されている。

煙洲会は昭和十四年六月に川崎大師八百吉に於て当時東芝に居られた菅要助さんを始めとす

る皆様方により始められたが、煙洲先生は此の会に出席するのを最大の楽しみにして居られ、「ワシは煙洲会のオカゲで長生きできた」と常にお話されていたが、昭和三十六年八月二十九日 九十歳でお亡くなりになられた。

煙洲会は先生亡き後も毎月続けられて近く六百回に達しようとしている。最近直接煙洲先生を知らない年代の卒業生の方の出席も多い。仲々楽しくやっていますので出席ご希望の方はご連絡下さい。

終りに私なりに巻末にあった徳富蘇峰先生の詩を読みました。誤りを御指導頂ければ幸いです。

丁亥歳首有感

倉皇として厄歳を**鏝**り

更に最厄の辰を迎う

世局は滄桑の際

庸人**枢**を**秉**り

国体尊嚴を**喪**い

上下君臣**紊**る

(滄桑 桑田変じて滄海となる。世の移り変わりの激しい事)

(庸人 平凡の人) (枢 鈞 枢 要職・大臣)

産業日に衰退し

荒怠賃金を貪るむさぼ

幣鈔落葉の如くへいしやう

物価蒼旻を衝くそうびん

嘯集して強請を逞くたぐまし

国を挙げて半ば暴民あ

邪説海内に敷きし

風俗の淳を一掃す

苛政虎よりも猛なり

恒産の人滅絶す

匡濟するに俊傑無く

神州は荊榛と化すけいしん

浩嘆又浩嘆

誰と與に経綸を談ぜんだん

(幣鈔 紙幣のこと)

(蒼旻 蒼は春の青空 旻は秋の青空)

(敷く のべる、ひろげる)

(礼記の一節)

(荊榛 いばらとはしばみ 雑木林のこと)

(昭和十七年九月電気化学科卒 村松 四郎)

大正十二年九月一日
關東大震火災逢難記事

著者 鈴木 達治

平成四年九月二十日印刷発行

発行者 煙 洲 会

(世話役幹事 村松四郎)

〒一三五

東京都江東区豊洲四の六の二

電話 〇三(三五三一)五六三五

印刷所 株式会社白橋印刷所